

毒舌霊媒師は **愛**

を
知らない

甘くなる彼に溺れる夜を

毒舌霊媒師は愛
を知らない。

甘くなる彼に溺れる夜

高嶺まりな(たかみね まりな)

20歳。160cm。大学生。

財閥のお嬢様。霊媒体質。天然で、霊が見えない。

性に奔放。突然、特殊プレイを提案してくる。

真鍋聡一(まなべ そういち)

24歳。183cm。社会人。イケメン。有名動画配信者の霊媒師。まりなが危なっかしいので、最初は毒舌に注意して接していた

sampleは即エロから入ります。

ひょいと抱え込まれると、今度は近くにある
ベットに押し倒される。

「あ」

気付いたらキャミソールをズラされてて、直に
胸を揉まれていた。

「ん、はあ、ああ♥」

彼に触られてるのかと思うと、自分で触って
る時よりも感じてしまう。

「お前、胸感じるんだ？
もしかして、お前、結構1人でこういうのしてる？」

「し、して、ない」

恥ずかしくて、意固地になってた。

本当は、、、してる。

だって、そういうのに、興味あるんだもん！

「ふーん、まあ、良いけど」

焦らすかのように、先端には触れずに、揉むようにして、痛みがない程々の強さで揉まれる。

首筋に顔を埋められたかと思うと、チクリとした痛み。

「な、何して」

「お前は俺のだって証明」

と言うと、鎖骨にも痕を残していく。

彼の物という証が付けられていく。
それが、こんなにも嬉しい。

その指先が焦らしていた胸の先端をぎゅっと摘んだ。

「んあっ♡」

胸の先をスリスリと撫でられて、鎖骨から胸にかけて、キスマークを付けられて、舌をツーツとなぞるようにして這わされる。

そして、舌が胸の先を舐める。

「ふあっ♡」

自分じゃ絶対に出来ない事をされ、尖った先を執拗に舐め転がされて、吸われる。

「ん、ふう♡」

もう片方にも同じ事をする彼の方を見る。

私の胸は、彼ので濡れていて、ピンクだったそこが真っ赤にいやらしく腫れていた。

それに恥ずかしくなる。

お腹にもキスをされて、舌を這わされる。

そして、下着に手をかけられる。

それに、ビクツとなる。

耳元で、良い？

と許可を取ってくる彼。

それに、コクコクと頷く。

シミの出来たそれが脱がされて、肌寒さを感じる。

そこに彼の熱い手が触れてくる。

パカっ♥と大きく足を開かれる。

なにこの体勢！？

漫画とかでは見た事があるけど、実際に自分がされると恥ずかしくて堪らない。

そして、クパァッ♥割れ目も開かされる。

自分でも見た事がない所を好きな人に見られている。

そう思うだけで、変な気分になる。

「...すごっ♥俺なにもしてないのに、めっちゃ濡れてるし、ビクビクしてる。
俺に見られるだけでも感じちゃう？♥」

「そ、そんなことは」

「安心しろ。お前初めてだから、ちゃんと優しくしてやるからさ」

と、頭を撫でられながら言われる。

それに安心して身を委ねられる。

彼の指が、ヌルヌルになっているそこに触れる。

それだけで、ひっ♡とビクッリしてしまい、腰が勝手に跳ねる。

「...大丈夫。気持ち良くしてやるだけだからな♡」

と言って、顔中にキスされる。

クチャピチュ♡という濡れた音が響く。

上下に優しく動く彼の指に安心感が募るが、それが、敏感なクリトリスに触れた瞬間、また腰が跳ねた。

「ひあ——っ♡♡」

パチパチと花火が散る。逃げる腰を押さえ付けて、私の弱い所を重点的に責めてくる。

「んー、ここ気持ちいい♡
お前感度良いな♡最高♡俺好み♡」

グチャグチャ♡とさっきよりも激しく絶妙な力加減でクリトリスをめちゃくちゃに転がされる。

硬くなって大きくなったクリが、普段は隠れている皮の中から、少しだけ顔を出す。

それを知らずになのか敢えてなのか、その皮から勝手に出ている敏感な先端を、コロコロと転がされる。

溜まったもんじゃない！

「いやああああー————♡♡らめえ
えええ———♡♡そこ、らめなのお
おおお————♡♡」

「ここ、気持ち良過ぎちゃう？
スゲー反応すんじゃない♡
俺の指気持ちいい♡」

いやいやと首を振るも、逃げられない。
グリュグリュと上下左右に滅茶苦茶に潰される。

「やらああ——♡♡も、もう、いっちゃ♡」

と泣きながらやめて♡と訴えるが、面白そう
にこちらを見詰め続けるだけ。

全然やめてくれない！

もう、本当に無理♡

「イクイク♡♡やらああああ——♡♡もう
むりい——♡♡」

こんな風になるまでの彼はかなり素っ気なかったのに、愛されたらこうなっていた。

真鍋聡一、彼は最初かなり素っ気なかった。

私は不幸体質である。

子供の頃からついてなくて、友だちになれそうな女の子が現れても、一緒にいると呪われそうと避けられる毎日。

暴言をよく吐かれて、心が何度となく折れそうになった。

でも、全員ではない。中には普通に話しかけてくれる子もいたのが、救いであった。

ある日親に紹介された占い師によって、霊媒体質である事が発覚。

そして、色々な事を試して、お祓いなどをして、次の日には何かしらいるらしく、不幸は続いた。

そして、何回試したか、もうどうでも良い、治らないと思っていた時に会ったのが、本物の霊媒師である、真鍋聡一であった。

彼は巷の間ではかなり有名な動画配信者らしく、イケメン霊媒師と呼ばれていた。

彼のお陰で救われたとする投稿が相次いでいて、親はそれを見て彼に依頼したらしい。

彼の案内するままに、神社の境内へと入っていく。

イケメンの彼にドキドキしてチラチラと見ると、直ぐに彼と目が合うが、スッと逸らされる。

この時私は大学生になったばかりで、彼も大学を卒業したばかりの社会人だと言う。

大人な彼に、ドキドキとしてしまう。

そして、白の着物に着替えた私は、境内での本格的なお祓いを受けた。

それ以降、続いていた不幸が嘘のようになくなり、彼は本物だと、私は感心した。

感謝の気持ちを伝えるために、再度彼に会いに行き、話しかけると、お客様対応として作られた笑顔で和やかに話してくれるが、確実に距離を感じる。

親とは和やかに話すのに、私には短く答えるだけで、ニコニコしているのに素っ気ない人だと思った。

しかし、数か月ほどが過ぎると、また不幸がやってきた。

なので、3、4か月単位で、また彼に会いに行くと、一瞬しかめっ面をされた後に、直ぐにニコツと爽やかな笑顔で、また会いましたね。と言ってくれたので、カッコいい！！とキャアキャア！思っていた。

この霊媒体質も、彼と会えるならいいかも？と私は単純に考えていた。

そして彼から、御札を渡されて、肌身はださず、持っていてください。と言われたのだが、それは直ぐに行方不明になった。

そして、それを彼に話すと、

チッ！あの霊は本当に厄介な！

と言われたので、え？！なんて言ったの？！
聞き間違い？と思った。

そして、お前もなん回も取り憑かれるんじゃないよ！

とキツイ口調で言われたので、呆然としてしまふ。

彼曰く、ちゃんと心の中で拒否すると、霊は寄ってこなくなるらしい。

でも、拒否しないと普通に入りこまれて、最悪そのまま命を落とすこともあるとか？

それを聞いて、私はゾッとしてしまった。

それ以降、彼は私の親になにか言ったらしく、一ヶ月に一度境内に来てくれと言った。

「お前、霊に好かれすぎだろ？
しかも、悪霊にばかり好かれやがって。全く
厄介なやつだなあ。」

と言われたり、

「お前は俺の神経すり減らす気か？
危ないって何回言えば気がすむ？
御札も敗れたり、なくなったりするぐらいの強
力な霊がお前に取り憑いてるんだぞ？
そこんどこ自覚しろ！」

と彼は見た目とは違い、性格はキツくて口が
悪かった。

でも、言ってることは優しいし、彼の側にいると楽で、だから、顔が好みだったのもあり、次第に惹かれていった。

真鍋目線

正式に付き合い始めると、今度はやたらとベタベタしてくるようになった。

...正直物凄く嬉しい。

しかし、拷問に近い。

甘えてくる彼女は、それはそれは可愛くて耐えられそうもない。

俺は少し距離を取ろうと決意した。

しかし、その直後、まさか、彼女の方からしなやかと提案される。

しかも、特殊プレイ内容。

寝てる相手にとって、お前それ良いのかよ！

え？俺にして欲しいって事！

で、拘束プレイ！？

なにそれ！俺童貞なんだけど！

俺は顔が良かったので、それなりにモテだけど、性格が捻くれてるし、普通の人には見えないものが見えるので、おかしい奴扱いを受けてきた。

なので、女の子とは付き合ったことがない。

職業も霊媒師という怪しい不安定な職。

有名人になっても、軽く声をかけてくる女の子はいても、本気の女の子は寄って来ることはなかった...

しかし、この年になると、やり方は知ってる。

しかし、俺は彼女を心から愛している。

俺はそれを受け入れた。

ぶっちゃけ興味もあつた....。

彼女の方から言い始めたんだから、問題はないだろう！

その後、耳元で、ピルを飲んでる。

と言われた後、俺を見ながら薄く微笑む。

...生でしても良いって事？

お前、どんだけ俺を試すんだよ！

もう俺、頭パンクしそうなんだよ！

その後、俺はいつも通りに、彼女が淹れてくれた紅茶を飲んで眠りについた...

.....

...

揺れる感覚で目が覚めた。

誰かに運ばれているみたいである。

上を向くと、彼女の姿。

...いや、なんだこれ！

なんで俺まりなに運ばれてんの！？

...あ、また途中で寝たのか？

たまにソファで眠ってしまい、風邪を引いた
事があって、
それ以降、ソファで寝てたのに、たまにベッ
トで起きる事があった。

彼女に聞くと、風邪引くと困るだろうから、運んで寝かせた。との事。

俺重いのに、よく運べたな。
と言うと、趣味が筋トレなんです。と答えた。

...同居するようになってから知ってるけど、まりなは見た目細いのに、筋肉質なんだよなあ。

俺の腹筋を見た後は、腹筋割れてて羨ましい。
私も割りたいとか言ってた。

...腹筋バキバキ彼女、か。

...ちょっと遠慮したい。

今回もそういう事なのだろうと、思っていた。

そして、ベットに寝かされる。

そのまま立ち去ると思っていたのだが、急にズボンに手をかけてきたので、

ギョッ！？とした。

お前何して！？

と言いそうになったが、考える。

睡眠中に、ヤッても良いか？と言っていた事を。

...そういう事かよ！？

俺の方が拘束される方なのね！

...分かったよ！それもそれで面白そうだし良いよ！

マジで読めない奴だな！
飽きない女！

...つまり、俺は寝てないといけないんだよな？

OK分かった。お前の事好きだから付き合っ
てやるよ！

こんなの許すのお前にだけだからな！

と、俺は寝たふりを続けた。

まりな目線

保健体育で見たのとは違う、上を向いたそれに、少し戸惑う。

漫画とかでは、白抜きやモザイクばかりの修正しか見た事なかったけど、これが本物の…。

独自の匂いのするペニスに、恐る恐る触れると、ビクッと真鍋さんの体が反応する。

それに、驚いて、彼の方を見上げると、目を瞑って寝ている。

起きたかも？と思ったけど、気のせいだったみたい。

一先ず、浴衣を半端に脱いで雰囲気を作る為に、下着一枚になった。

私はテンションが上がっていた。

少し舐めてみると、ピクピクと反応を返し、さっきよりも熱くて硬くなっていく。

最初は口にいれるのはちょっと。
と思って扱きながらも、亀頭部分を舐める。

その独自の味。
美味しくはないけど、真鍋さんのだと思うと、
何故か嬉しくて、ドンドンと積極的に舐める。

なんか、美味しいと思えるようになってきた。

なので、先端部を吸ってみた。

すると、はっ！という声が上がり、彼の体がブルブルと体が震える。

それに、少しビクッとなり、彼の様子を伺うも、起きる様子はない。

なので、私は彼の方をチラチラと見ながらも、先端を舐めたり吸ったりし続けた。

（こんなに大きくなるの！）

最初の頃よりも大きくそそり立ったそれに、挿入出来るのか？と不安がよぎるが、

大丈夫！大丈夫！と椅子に座ってる彼の上に乗る、下着越しに性器同士を擦り付ける。

彼のを舐めていて、私も濡れてしまっていた。

ムラムラモヤモヤとして、私も一緒に気持ち良くなりたい！と思い始めたからだ。

たまにクリトリスに引っかかって、堪らなく気持ち良くて、今の状況に興奮していたのもあり、さらに濡れていった。

——これで、彼が起きたら、と考えると、怖いと思うと同時に、ゾクゾク！と体が震える。

はあはあと勝手に息が切れて、彼を起こさないようにと、出来るだけ、抑える。

寝てる相手に何をしているのかと思うけど、これが漫画や小説の中にしかない世界か。と思うと、酷く興奮する。

相手は寝てるとはいえ、好きな人とするセックスってこんなに良いの？

1人でしてた時よりも何倍も気持ち良い！

しかし、気分が盛り上がってくると、気持ちが抑えられなくなっていく。

相手は寝てるんだしと、どさくさに紛れて想いを伝えてみる事にした。

「好き好き好き♥」

と言って抱き付く。

ずっと好きって言いたかった。

でも、言えない...。

だって、婚約者がいて許されてないから。

抱き着いたまま激しく前後に動くと、キャミソール越しに胸の尖りが真鍋さんの服に擦れて、体が震える。

...気持ち良い。

キスしても良いかな？と思って、口付けようとした。

すると、彼と目が合った。

緩くとは言え縛っていたはずなのに、腰に手が回されている。

「え？あ、、え？」

「...お前、何やってんだよ♥」

と言って穏やかに微笑む真鍋さん。

うっそ！いつから起きてたの！？

「...最初から起きてるわ。バーカ♥」

と言うと、俺の事好きなの♥

と耳元で囁かれる。

「え？あ、ち、ちが！」

咄嗟に、嘘をつきそうになった。

だって彼は秘密の恋人だから。

「は？何が違うだよ。
コッチはバッチリ聞いたんだよ♡」

と言って性器同士を押し付けてくる。

どう動くか分からない彼の動きに翻弄される。

「あ、ふ、んあ♡」

「...はあ、可愛い♡
もっと声聞かせて♡」

と耳元で囁かれるので、ゾクゾク！としてしまう。

頭に手を持っていかれ、頭皮を優しく撫でられる。

それすらも気持ち良くて、快感を拾い上げていく。

不意に、深く口付けられる。

驚いて開いていた口の中に舌が入って来て、吸われるようにして、口の中を掻き回す。

ゾクリと、体が震える。

——何、これ？

本当にこれが、キスなの？

知らない。こんなの。

今は動かしてない筈の下半身が更に濡れていくのが分かる。

キスだけでこんな気持ち良いの？

くちゅ、ぴちゅ、というイヤらしい音が聞こえて来て、口の中を舌が這い回る。

上顎を撫でられると、擦ったいような不思議な気持ち良さにふわふわとしていく。

でも、息継ぎが分からなくて、息苦しくなって、

んん！？

と言うと、口を離してくれる。

ふはっ！と息継ぎをすると、愛しげに目を細めた彼に見詰められ、

恥ずかしさから、目を逸らしてしまう。

「これが、大人のキス、ね♡
お前ってさ、初めて、だよな？」

はあはあと息を整えながらも、コクコクと頷く。

すると、スゲー嬉しい♡

と耳元で囁かれ、耳を舐められ、態となのか、音を立てながら舐められる。

ピチュピチャというその音が嫌に響く。

そして、ひょいと抱え込まれると、今度は近くにあるベットに押し倒される。

そして、下半身だけ中途半端に脱がされていた彼の、鍛えられた肉体が顕になっていく。

それに、キャアキャア！と内心思いながらも、こんなカッコいい彼に抱かれるのかと思うと、胸がキュンキュンしてしまう。

「あ」

気付いたら浴衣をズラされてて、ブラジャーを外されて直に胸を揉まれていた。

「ん、はあ、ああ♥」

彼に触られてるのかと思うと、自分で触ってる時よりも感じてしまう。

「お前、胸感じるんだ？
もしかして、お前、結構1人でこういうのしてる？」

「し、して、ない」

恥ずかしくて、意固地になってた。

本当は、、、してる。

だって、そういうのに、興味あるんだもん！

「ふーん、まあ、良いけど」

焦らすかのように、先端には触れずに、揉むようにして、痛みがない程々の強さで揉まれる。

首筋に顔を埋められたかと思うと、チクリとした痛み。

「な、何して」

「お前は俺のだって証明」

と言うと、鎖骨にも痕を残していく。

彼の物という証が付けられていく。
それが、こんなにも嬉しい。

その指先が焦らしていた胸の先端をぎゅっと摘んだ。

「んあっ♡」

胸の先をスリスリと撫でられて、鎖骨から胸にかけて、キスマークを付けられて、舌をツーツとなぞるようにして這わされる。

そして、舌が胸の先を舐める。

「ふあっ♥」

自分じゃ絶対に出来ない事をされ、尖った先を執拗に舐め転がされて、吸われる。

「ん、ふう♥」

もう片方にも同じ事をする彼の方を見る。

私の胸は、彼ので濡れていて、ピンクだったそこが真っ赤にいやらしく腫れていた。

それに恥ずかしくなる。

お腹にもキスをされて、舌を這わされる。

そして、下着に手をかけられる。

それに、ビクツとなる。

耳元で、良い？

と許可を取ってくる彼。

それに、コクコクと頷く。

続きは製品版で！